

令和2年度 利島村教育委員会  
「教育に関する事務の管理及び執行の状況の点検及び評価」に関する意見

帝京大学文学部心理学科  
帝京大学大学院文学研究科臨床心理学専攻  
講師 稲垣 綾子

利島村教育委員会が策定した全34項目の教育目標に対する自己評価は、A評価が26項目、B評価が6項目、C項目が2項目という結果でした。今年度は、ここ数年度はなかったC評価が増え、A評価が2項目減った結果となりましたが、内容を分析しますと、目下猛威をふるう新型コロナウイルス感染症対策による行事等の中止ないし延期による活動自粛の影響と考えられました。その一方、新型コロナウイルス感染症予防対策を進めながら、子どもたちの教育活動への維持ならびに発展への絶え間ない検討を行ってきた実態が前年度より上昇した評価項目を通して浮かび上がってきます。今回の評価結果は、イレギュラーな事態における、一層きめ細やかな教育体制の吟味と判断、実行してきたものであり、実質的には教育目標にむけて検討を怠らずに、管理・執行がなされた質の高いものであったと判断することができます。

以下、主な項目の自己評価およびその評価根拠について、簡単にコメントを述べさせていただきます。

#### 1. 教育委員会の活動

前年度に比べ、(4)教育委員の学校支援(学校訪問、学校施設点検)がA評価と上昇していました。学校長、副校長等と、とりわけ新型コロナウイルス感染症対策について綿密な意見交換を行い、子どもたちの健康、安全を第一に考え、教育体制への助言を行い続けたことは高い評価に値すると考えます。全国で実施された未曾有の休校措置のなか迎えた年度の幕開けでしたが、子どもたちの入学進級の節目をはじめ、管理職ならびに教職員が家庭訪問をして教科書や宿題を配布し、子どもたちの様子を常に気にかけてきたこと、また、子どもたちの生活リズムが整わない等、家庭からの声にも耳を傾け、他島での状況や水際対策状況等をふまえ、学校再開の根拠をそろえた上で、朝の会と帰りの会の登校や体操教室の開催等を段階的に進め、子どもたちの生活と育ちを支援していったことは、きわめて評価の高いものだったと思われまます。日頃から大事にされている、子ども・家庭・地域コミュニティをつなぐ学校運営の基幹とその機能が、こうした見通しの立たない危機状況のなかで遺憾なく発揮された局面だったのではないのでしょうか。まさに、「教育の原点は、利島にあり」との教育長のお言葉が身に染みるようです。

また、(3)教育委員会と村長との連携では、村長の方針に基づき、教育全般について密に意見交換・情報共有を行い、村長の方針である子育てしやすい環境づくりの観点から家庭の教育費負担軽減に引き続き尽力されたこと、また、ふるさと利島に思いを寄せる「利島村伝統文化芸能行事」も縮小実施とのことでしたが、コロナ禍においても村全体の民意の反映に貢献し続ける教育委員会の取り組みは、今後も維持していただきたいものと感じました。

## 2. 教育委員会が管理・執行する事務

前年度より引き続き、地方教育行政の組織及び運営に関する法律に規定されている、教育の機会均等、教育水準の維持向上及び地域の実情に応じた教育の振興が、生き生きと図られていることが、利島小中学校の学校だより、学校ホームページの学校長コラム、教育長によるウグイス通信からも伝わってきます。1月に行われた小学6年生の月一発表会では、「マイドリーム」を英語でスピーチしたそうですが、利島小中学生のなりたい職業一位が、**teacher** だったとのこと。きっと、身近にいる教職員の関わりによって自身が勇気づけられ、エネルギーが高まる内的実感を子どもたちが体験していることの反映でしょう。管理職ならびに教職員が、子どもたちにとっての大人の良いモデルや将来の展望になっていることが想像されます。

また、利島村奨学金制度や離島高校生就学支援事業などの事務も滞りなく行い、さらに離島高校生就学支援事業では、昨年度策定された支給額の増額によって保護者に喜ばれているとのこと、村長の子育てしやすい環境づくりの方針が実際に行き渡っている様子が窺えます。

## 3. 教育委員会が管理・執行を教育長に委任する事務

利島村教育大綱に則り、教育目標は学校の児童・生徒のみならず、島民全体の人としてあるべき姿を想定して制定し施策を進めているとのこと、伝統文化行事やふるさと学習をはじめ、“村全体で子どもの面倒をみる”という利島の慣習を大事に各所と連携しながら、教育委員会ならびに教育長が管理・執行に従事されていることが随所に窺えます。

(3) 社会性を育む教育の推進が B 評価、(4) 児童・生徒の他地区との交流が C 評価に下がりましたが、これも新型コロナウイルス感染症対策によるものであり、修学旅行、中学生海外ホームステイ事業、多摩島しょ子ども体験塾、檜原村の小中学生との交流等の実施について中止または延期の判断をせざるを得なかったことの影響が大きいようです。

ただし、感染状況を鑑み、島と島の間であれば問題ないと判断し、今年度の島外学習、修学旅行は、中2は大島へ、中3は三宅島へ、小5・小6は新島へ行き先を変更して実施されたとのこと。活動制限を強いられる生活のなか、仲間とともに利島での日常を離れて他島で過ごした時間によって、子どもたちの心身は大いにリフレッシュされたことでしょう。コロナ禍における、忘れられない体験になるのだろうと思われます。

## 4. 学校教育

13項目すべて A 評価であり、12月に小職が訪問させていただいた際にも、全クラスにおいて、きめ細やかな教育活動が行われている様子を拝見し、この評価根拠を目の当たりにさせていただきました。まず、他校にくらべ、子どもたちの書字が非常に丁寧で綺麗であり、文章も子どもたち自身の体験に基づいてしたためられているものが多いと感じました。中でも目を見張ったのは、小学校中学年にして、利島の農協など地域施設やコミュニティに関する関心と、子どもたちなりの問題意識と提案をしたための掲示物でした。自分たちの生活の場である学校だけでなく島のコミュニティ全体に関心をもち、考えることのできる、利島の子どもたちの市民意識の高さが窺えました。中学生になると、大人顔負けの成熟した考えと実行力、礼儀正しさを備え、利島小中学校の教育目標である「自立一よ

く考え進んで学ぶ人、思いやりのある心豊かな人、元気にたくましく生きる人」へと変化していく発達プロセスを窺い知ることができました。小職の所属する大学でのゼミでも、大学生によるインタビュー調査（テーマ：コロナ禍における生活変動を子どもたちはどのように体験しているのか）にご協力いただきましたが、参加してくれた子どもたちはパソコン画面の向こうでも丁寧に挨拶をし、一つ一つの質問に真摯に向き合い、考えを言葉にしていく姿に、大学生が面食らう場面が少なくなかったのです。

こうした子どもたちの様子には、(3) 自尊・他尊感情を育て、豊かな心をはぐくむ道徳教育にて、学校長が推進する「ほめて認める指導」も大きく作用しているのではないのでしょうか。子どもたちの内から沸き起こる考えや思い、感情、体験を肯定的に受けとめ、個性ゆたかな一個人として認めてくれる教員ならびに大人の存在が、子どもたちにとっての安心の基地となり、自分の世界をどんどん広げていくための糧になっていると考えます。

また、コロナ禍における学校教育では随所で教職員が工夫を凝らしてきたと思われませんが、(4) 健康の保持・体力の増進を図る教育活動では、全国的に体力低下が危惧される中、長座体前屈と 50m 走は男女ともに記録の伸びがみられたこと、また、臨時休校中に体育教諭による運動教室（8 割程度の児童生徒が参加）を開催したことは、活動制限・外出自粛が求められる中であって、柔軟な対応を図りながら実施できたものとして評価されるものと思われま

す。(5) 小中一貫教育の継続では、9 年間の学習指導計画作成にむけて、月 1 回の定期的な作業日を設定し、一部教科において小中教員の教科部会が実施できたことは、小中接続の困難とその改善を検討する全国の小・中学校に向けても、大変に意義深い作業と思われる。なかでも、中学校の教科書選定にあたり、小学校の教員も携わる作業は、小中一貫教育運営の真髄といえるのではないのでしょうか。9 年間の子どもの育ち、学び、教育について知見を深め合える有意義な時間になると感じました。

(7) キャリア教育の推進では、小学校にて「キャリア・パスポート」を活用し、児童生徒の職業観・勤労観の醸成を図るとともに、キャリア教育の 4 能力の発達段階的向上に努められたとのこと、利島の子どもたちがこれからどんな「キャリア」を発達させていくのか、興味深いですね。実は、「職業」と日本語訳される英単語には、**carrier** のほかに、**vocation, occupation** があり、どれも原義や意味あい異なるのですが、中でもキャリア **carrier** は「職業上の成功」という意味の他に、「人生路」「一生涯」という原義・意味で使われることの多い言葉です。職業に限らず、自分の人生の旅路を考えていく、そんな視点が利島の子どもたちにも開かれていくのもよいかもかもしれません。

そういう視点で眺めると、(8) 故郷教育もキャリア教育と有機的に関連づけられていくように思いました。また、学校だより 1 月号に掲載されていた職業講演会では、事前に「人は何のために働くのか」を考えさせたところ、子どもたちにさまざまな回答があったこと、その根底には「人は人のために働いている」という考えがあり、自己の生き方について考える活動を中学校では今後も実践し指導していく、との文言に、近年キャリア・カウンセリング領域で重視されてきている“より広い意味での仕事（**work**）と関係性（**relationship**）に目を向ける”視点に通じるものを感じました。総じて、質の高いキャリア教育をすでに実践されている様子が窺われます。

(9) 家庭・地域に開かれた学校では、運動会や文化祭等、例年のように地域の方に参

加していただくことが叶わなかったことは、村全体にとって残念なことだったと存じます。また、今年度着任された教職員と地域とのつながりが例年よりも不足することになってしまった事態も、致し方ないことで大変に心苦しく思います。コロナ禍における利島の新生活では想像をこえる不安、困惑、混乱、孤独を抱く場合があったかもしれません。こうした心理状態は、異常事態において生じる極めて自然なことと言われています。後から心身の疲労が出てくる場合もございますので、教職員のメンタルヘルスという観点からもしばらく気にかけていただけるとよいかもしれません。

## 5. 社会教育

(1) 芸術文化事業の実施は、「利島村春のお笑い劇場」が中止となり、C評価となりましたが、(3) 文化財保護の充実は、学校のふるさと学習として教育委員会が利島の昔の生活について子どもたちに説明したり、利島村伝統文化芸能実行委員会と連携し、「ふるさと利島に思いを寄せる日」を縮小ながらも実施したりしたことで、A評価に上昇したようです。歴史の長い利島の、失われつつあるという貴重な伝統芸能継承のため、こうした情勢によって形骸化してしまわないよう、縮小ながらも実施できたことは、評価に値するものと思われまます。

## 6. 放課後児童クラブ（学童）

学童便りを拝見しますと、新型コロナウイルス感染症対策のため、年度初めは少数の子どもたちが通う縮小した形でのスタートだったようですが、その間に、学童の部屋・廊下・棚などが消毒も兼ねた清掃でリニューアルされたとのこと。逆境をバネに新しい風を吹き起こすエネルギーを感じます。海がみえる窓の月ごとの飾りも素敵ですね。

学習（宿題）指導が定着し、児童が意欲的に取り組んでいるとのこと。子どもたちが学校での学びを、放課後の学童でじっくり自分のものにしていくプロセスも同時に定着していることも想像されます。いずれも、日頃の指導員の連携と工夫によって支えられているものであることが、学童だよりから伝わってまいりました。

\* 最後に、ウグイス通信にあった〈久遠の契り〉の一節が、このコロナ禍での（「密」ではなく）「蜜」な利島の教育における取り組みを表しているように感じました。

「孤島なればこそ 苦しさに悶え 悲しさに涙もした  
孤島なればこそ 一つのを分け合い 心から話しもした  
一つのを分け合い 心から話しもした  
孤島なればこそ この出会いを愛し 真ことの誓いもした」

イレギュラーな事態における利島の取り組みに、  
“教育の原点”の一端に触れさせていただいた気がしております。感謝申し上げます。

以上